

甲斐市立 玉幡小学校 自己評価書

令和 8年 2月2日 (月) 作成

校長「堀内 貴司」 記述者 職名(教頭)「城内 優子」

学校教育目標「知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成」

学校経営方針「学びあい 想いあい 笑いあえる学校づくり」

◎すべての基盤:学級経営の充実【居場所のある学級づくり】

○よりよい人間関係づくり ○達成感の獲得と自己肯定感の醸成

- 1 児童や地域の実態をふまえた効果的な教育課程の編成と実施・改善に努める。
- 2 より良い授業づくりと学習環境の整備を通して、確かな学力の育成に努める。
- 3 生活規律を大切にし、思いやりの心を育む学級・学校づくりに努める。
- 4 児童の体力向上・健康の増進に努める。
- 5 一人一人のニーズに応じた特別支援教育の実施に努める。
- 6 児童の安全・安心な生活を守り、保護者や地域に開かれた学校づくりに努める。

1 全体評価(別紙1参照)

- ・「教職員自己評価」「保護者アンケート」「児童アンケート」の3つのアンケートを実施した。それぞれのアンケート結果を三つの視点で分析した。①教職員の自己評価に基づく分析,②児童,保護者の二者比較に基づく分析,③教職員,児童,保護者の三者比較に基づく分析の三点である。
- ・全般として、肯定的な回答率が非常に高く、教職員自己評価においては、多くの項目で100%または90%台後半の数値を示した。
- ・児童アンケートでは、児童は「学校が楽しい」と感じ、基本的な規範意識や学習習慣を身に付けている。特に「朝食」や「宿題」の習慣は家庭の協力もあり素晴らしい成果が出ている。
- ・課題として、メディア利用時間(スマホ,ゲーム等),相談体制の強化などがあげられる。

2 項目ごとの評価結果(達成状況・改善策)

I 学校教育目標に関して・学校経営について

達成状況	<ul style="list-style-type: none">・全教職員が学校の教育目標を理解し、それに基づいた計画・実践を行っている。組織としての方向性が明確に共有されており、極めて適切な学校運営がなされている。・学校独自の取組(オリジナル項目)に設定しているノーチャイム制,あいさつ指導,生活規律,言語能力,対話力の育成など,児童の実態に即しており,非常に適切に機能していると判断できる。
改善策	<ul style="list-style-type: none">・ICTの「効果的な」利活用(肯定的回答83.9%)については,ICTの「量」は確保されつつあるが,「質(効果的な活用)」への転換が過渡期にあり,機器の操作だけでなく,授業改善につながる具体的な活用事例の共有や研修が必要。・キャリア教育,地域人材の活用(肯定的回答90~93%)については,「機会が少ない」,「キャリアパスポートをうまく活用できていない」との記述が見られ,取組の必要性は理解されているが,日々の教育活動の中で実践する具体的な場面や方法(カリキュラム・マネジメント)の工夫が求められている。・働き方改革と校務分掌(肯定的回答96.8%)については,全体としては適材適所が図られているが,一部の教職員への業務集中が懸念される。業務の平準化や効率化をさらに進める必要がある。

II 学校運営について(児童,保護者の二者比較分析より)	
達成状況	<p>1 心の教育 (Moral Education)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ: 「自分からあいさつをしている」児童は 87.4% だった。家庭内でのあいさつ(保護者回答)は 98.0% と非常に高く,家庭と学校の双方であいさつが励行されているといえる。 ・思いやり: 「困っている人を助けている」と回答した児童は 44.2% に留まった。「助きたい」という気持ちを行動に移す勇気や具体的な方法について,さらなる指導の余地がある。 ・将来の夢: 約 82.9% の児童が「将来の夢や希望」を持っている。 <p>2 安全管理・安全指導 (Safety Management & Guidance)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相談体制: 「困ったときに相談できる先生がいる」と答えた児童は 77.4%,保護者は 72.6% だった。約 2-3 割の児童・保護者が相談先に不安を感じている可能性があり,相談窓口の周知や信頼関係の構築が継続的な課題である。 ・学校の安全対策: 「学校は安全な生活が送れるよう取り組んでいる」と考える保護者は 58.6% だった。校内の危機管理や登下校時の安全について,保護者への情報発信や連携強化が必要である。 <p>3 基本的な生活習慣 (Basic Lifestyle Habits)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝食: 「朝ごはんを食べて登校している」児童は 96.5% (保護者回答 99.3%) と,ほぼ全ての児童で定着しており大変良好である。 ・メディア利用: 学習以外でのスマホ・ゲーム利用時間が「2 時間未満」である児童は 49.7% に過ぎない。保護者の認識(72.0% が2時間未満と回答)よりも実態は長時間化しており,親子間での認識のズレが浮き彫りになっている。家庭でのルール作りや見直しが急務である。 <p>4 健やかな体を作ること (Health)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歯磨き習慣: 「一日 3 回以上(または指定回数)歯磨きをしている」児童は 43.2% だった。朝食摂取率の高さに対し,歯磨きの習慣化,特に昼食後の歯磨き等については改善の余地が大きいと言える。 ・健康基盤: 睡眠や朝食といった生活リズムの基盤は整っているが,メディア時間の長さが視力や睡眠の質に影響を与える懸念があり,総合的な健康指導が望まれる。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の重点課題としては,「メディア利用時間のコントロール」と「相談体制の充実」,そして「思いやりの行動化」が挙げられる。また,学校の指導や安全対策について,保護者への発信を強化し,理解と協力を得ていくことが重要である。 ・「相談できる先生がいる」と答えた割合は,児童,保護者ともに 7 割台にとどまっている。約 4 人に 1 人が相談相手を見つけにくいと感じている可能性があり,サポート体制の強化が検討課題と言える。 ・「報告,連絡,相談,確認」を確実に行うことで,組織での対応が可能になり,早期に教育諸課題を解決できる。今後とも,校長の指示のもと教頭を中心として,教職員間での情報共有を確実にやっていく。
III 学習指導について(児童用及び保護者用アンケート等も含めて)	
	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導(授業がわかる)については,教職員(96.8%)は,「基礎・基本の定着を図る授業を行っている」と高く自己評価しているのに対して,児童(87.6%)と保護者(85.0%)も8割後半と高い数値ではあるが,教職員の意図に対して若干のギャップが

達成状況	<p>ある。また、「児童一人一人の学力向上に力を入れている」について、保護者の肯定的な意見が5割を占めるものの、「わからない」(32.2%)の回答が目立つ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の理解と楽しさについては、「授業が楽しい」と感じている児童は平均約 83.7%で、「授業内容がわかる」と答えた児童は 87.5%に達している。保護者からも 85.0%が「子どもは授業内容を理解している」と評価しており、学校全体として高い水準を維持している。 ・「宿題を忘れずにする」児童は93.9%、保護者評価では98.4%と極めて高く、学習習慣の定着が見られる。一方で、保護者による「学校は学力向上に力を入れているか」という問いへの肯定的評価は、今回の集計範囲では数値が低く出る(または回答傾向が異なる)結果となり、学校の取り組みが家庭に十分伝わりきっていない可能性がある。 ・個に応じた指導の充実については、「個別支援が必要な児童への対応が十分でない」「運動が苦手な児童への声かけ」などの振り返りが見られた。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・自主学習は、児童の主体的に学習に取り組む態度を伸長させることができる。「家庭学習の手引き」や「がんばるカード」の取組を通して、学年の発達の段階に応じた効果について、保護者に周知し、学校と家庭が両輪となって、児童の学力向上を推進していく。加えて、学年だよりや学校 HP など日頃の授業の取組についても発信していくことで、学校の学習に対する取組内容を保護者に伝えることにつながると考える。 ・スマホ・タブレット等の使用については、情報モラル教育の推進と共に、今後も、保護者への啓発を行っていくことが大切である。同時に、学校においては、読み聞かせや学校図書館を中心とした様々な取組を継続・充実させ、読書の楽しさを感じ取らせていく。家庭学習の一つとしても読書を推進する取組を行っていく。 ・特別な支援を必要とする児童が増えてきている。多様な児童の誰一人を取り残すことがないように、合理的な配慮とその指導法について、特別支援コーディネーターを中心に、学校体制で取り組めるようにする。そのために、教職員間での情報共有を確実にしていく。特別支援教育体制の共通理解は進んでいるが、具体的な指導場面での個別の配慮には、引き続き組織的なサポートや人的配置の工夫が求められる。
IV 生徒指導について(児童用及び保護者用アンケート等も含めて)	
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> ・規範意識:「学校のきまりを守っている」(96.2%)、「廊下の歩行ルール(日本一のろうか)」(93.9%)、「無言清掃」(93.5%)など、学校生活のルールやマナーについては9割以上の児童が肯定的であり、規範意識は非常に高く育っている。 ・指導への信頼:保護者から見た「学校は間違った行動に対して指導しているか」という問いへの肯定的回答は 86.3% だった。 ・楽しさと友人関係:「学校は楽しい」と答えた児童は 91.3%(保護者 91.9%)、「仲の良い友だちがいる」児童は 94.2% だった。大多数の児童にとって学校が安心できる楽しい居場所となっており、人間関係も良好に築かれている。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・これからも、きまりを守り、「ノーチャイム」「日本一のろうか」「無言清掃」を意識して頑張っている児童の姿を認め、褒めながら、児童の規範意識の涵養を目指していく。 ・問題行動については、教職員や保護者等による早期発見と早期対応が何より重要である。できるだけ素早い対応ができるよう、日頃からの学級経営の充実を図ったり、児童・保護者とのコミュニケーションを深めたりしていく。特に、保護者対応については、管理職の指導のもと、各担任が、連絡帳や電話でのやりとり等、丁寧に関わりながら信頼関係を築いていく。児童が相談しやすい教職員であるために、児童とふれあう時間の確保に努める。校務効率化などの働き方改革を進め、ゆとりをもって児童に関わることができる時間

	<p>確保を図っていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業参観後、学級懇談会を設けて、保護者と教職員とが座談会方式で子育てについて気軽に語り合える場を設定することで、両者の学校教育活動に対する認識のズレを埋めるだけでなく、協力体制への強化につながると考えられる。また、昨今希薄になりつつある保護者同士の横のつながりを促す機会を設けることも大切なのではないか。
<p>V 地域との連携について(児童生徒用及び保護者用アンケート等も含めて、別紙2参照)</p>	
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> ・「発信」と「受信」の完璧なサイクル: 教職員の 100%が「要望を聞き」「広報している」と回答しており、情報のキャッチボールが機能している。 ・児童の高い地域愛: 児童の行事参加率(81.1%)が保護者(72.7%)を上回っているのは、学校での積極的な地域人材活用(93.6%)により、児童が地域の方々に親しみを感じている結果だと言える。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・「要望を聞く」から「共に創る」へ変換が必要。「何をしたか」の報告に加え、「地域の方の想い」や「児童の変容」にフォーカスしたストーリー性のある広報を強化する。例: PTA 新聞を保護者にゆだねて活性化を図る。 ・HP の閲覧数や反応を分析し、より保護者のニーズに沿った情報提供の形を模索する。コミュニティ・スクール(学校運営協議会)等の場をさらに活用し、学校と地域が対等なパートナーとして教育目標を共有する。 ・地域人材の活用(93.6%)をさらに進め、「単発のゲスト」ではなく、年間を通じた学習サポーターとしての関わりを増やす。教職員の持続可能な連携体制を模索し、「意識は高く、事務負担は低く」を実現する体制を構築する。
<p>3 まとめ</p> <p><成果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・R7 年度の教育活動は、学校教育目標や独自の重点施策が教職員に深く浸透し、高い水準で実践された。設定された目標や取組は、児童の自立や学力向上に寄与する適切なものであった。 ・学校独自の取組(オリジナル項目)に設定しているノーチャイム制、あいさつ指導、生活規律、言語能力、対話力の育成など、児童の実態に即しており、非常に適切に機能していると判断できる。 ・本校の強みは、教職員全員が地域とのつながりを大切にし、情報をオープンにしている点にある。この良好な関係を基盤に、次年度は、学校が地域に支えられるだけでなく、児童が地域を支える一員となるような、より深い双方向の連携を目指していきたい。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後は「ICT 利活用の質の向上」と「教職員の業務負担の平準化」を両輪として進め、教職員がより児童一人一人と向き合う時間とゆとりを確保していくことが、さらなる教育の質の向上につながると考えられる。 ・キャリア教育・地域人材の活用についての取組の必要性は理解されているが、日々の教育活動の中で実践する具体的な場面や方法(カリキュラム・マネジメント)の工夫が求められる。 ・個に応じた指導の充実については、特別支援教育体制の共通理解は進んでいるが、具体的な指導場面での個別の配慮には、引き続き組織的なサポートや人的配置の工夫が求められる。 	